

漢文訓読の初期条件 (初稿) [下]

—なぜ孤立語を膠着語に変換できたのか?—

古田島洋介*

⑪ 動詞性分離疑問副詞

疑問副詞については、④副詞の49～52(前号P1)で言及しました。けれども、「如何」「若何」「奈何」「奈何」のような動詞性を帯びた疑問副詞は、目的語がなければ、そのまま二字を連用しますが、目的語があると、二字が上下に分離して、目的語を挟み込むように使うのです。

170 巨人其如^レ予何^ニ? (『論語』子罕) *「如何」の分離

巨人其^レれ予^ヲを如何^ニせん?

171 吾如^レ有^レ萌^ニ焉何^ニ哉? (『孟子』告子上) *「如何」の分離

吾^レ萌^スすこと有^ルるを如何^ニせんや?

172 韓・魏能奈^レ我何^ニ? (『韓非子』難三) *「奈何」の分離

韓^ノ・魏^ノ能^ク我^ヲを奈何^ニせん?

173 其若^レ文^ノ・武^ノ何^ニ? (『左伝』僖公二十四年) *「若何」の分離

其^レれ文^ノ・武^ノを若^ク何^ニせん?

174 虞^ハ兮^ハ虞^ハ兮^ハ奈^レ若^ク何^ニ? (『史記』項羽本紀) *「奈何」の分離

虞^ハや虞^ハや若^ク何^ニせん?

175 如^レ此^ノ良夜^ニ何^ニ? (『宋』蘇軾「後赤壁賦」) *「如何」の分離

此^ノの良夜^ヲを如何^ニせん?

右のうち、最も有名なのは「秦・楚」項羽が愛姫の虞美人を歌った174でしょうが、その直前に愛馬の騅について詠んだ一句「騅^ニ逝^ク兮^ハ可^ク奈何^ニ」(騅の逝かざる奈何すべき)があります。同じ「奈何」でも、目的語がなければ二字をそのまま連用し、目的語があれば二字が上下に分離する——両者の相違がはっきりわかるでしょう。

もっとも、「如何」や「若何」がそれぞれ上下に散じたからといって訓読が変わるわけではなく、ちょっと返り点を加えれば済む話です。「動詞性分離疑問副詞」なる仰々しい名称なものは、たとえばドイツ語の分離動詞が示す複雑な振る舞いに比べれば、はるかに単純な分離現象でしょう。「如何」の前字「如」が切り離されて文末に現れたり、二字のあいだに不定詞の標識が入り込んだり、後字「何」が過去分詞に変容したりすることはありません。あくまで「如何」なら「如何」が「如+〔目的語〕+何」となるだけです。

類例として「何為」の分離現象も挙げておきましょう。これは一般に「何^ニ為^ス」と訓ずる疑問副詞ですが、やはり上下に分離する場合があります。

176 如今人方為^ハ刀俎、我為^ハ魚肉。何辞^ソ 為^サ? (『史記』項羽本紀)
如今や人は方に刀俎たり、我は魚肉たり。何ぞ辞すること^ナを為^スさん?

177 天之亡^レ我、我何渡^ソ 為^サ? (同右)

天の我を亡ぼすに、我何ぞ渡ることを為^スさん?

それぞれ「何為^ハ辞^ハ」「何為^ハ渡^ハ」と書いてもよさそうなのですが、おそらくは「何」と「為」で上下を挟みつけて動詞「辞」「渡」を強調した表現なのでしょう。前掲170〜175と異なり、目的語(名詞)を挟みつけているわけではなく、あくまで動詞の上下に「何為」を散じた強調表現かと思われます。

この分離形については、「何為」を機械的に二分して「何^ハ V^ハ 為^ハ」と訓読してみても日本語になりません。そこで「何」に常用訓「何^ハ」を当て、「為」を「為^ハ」と読み、「何^ハ V^ハ 為^ハ」で収束を図るのが定石になっています。この訓読には古人の難渋した末の工夫が窺われると言つてよいでしょう。

しかし、結果として、返り点を持ち出すことなく訓読に成功しているのは事実です。できるかぎり語順の転倒ナシに訓読したい——これが古人の基本方針だったのでないでしょうか。

四 文法2 文型

① 五文型

漢文の文型は、おおむね英語の五文型によって捌けます。現代英語と異なり、主語の省略が利く点は、むしろ日本語と同じですから、日本人にとって馴染みやすいと言っても過言ではないでしょう。英語の五文型に従って例文を挙げてみます。

◇第一文型 (S) V

178 一軍^ハ軍^ニ於^テ成^ル阜^ニ……一軍^ハ軍^ニ於^テ灑^ル池^ニ。(『戦国策』趙上・武靈王)
一軍は成阜に軍し……一軍は灑池に軍す。

前文・後文とも主語は「一軍」、動詞は「軍」。それぞれに前置詞「於」を冠した副詞句が着いています。

179 臣^ハ切^ニ為^リ大王^ノ計^ル。(同右)
臣切に大王の為に計る。

主語は「臣」、動詞は「計」。両者のあいだに副詞「切」と副詞句「為大王」が割り込んでいます。

◇第二文型 (S) V C

180 今楚^ト与^レ秦^ヲ為^リ昆弟^ノ之^ノ国^ト。(同右)
今楚と秦とは昆弟の国たり。

主語は「楚与秦」、動詞は「為」、補語が「昆弟之國」です。「為^レ昆弟

之国」(昆弟の国と為れり)と訓じて、文型に変化は生じません。

181 趙必為天下重国。(同右)

趙必ず天下の重国たらん。

主語は「趙」、副詞「必」が割り込み、動詞は「為」、補語が「天下重国」です。これまた「為天下重国」(天下の重国と為らん)と訓読しても、やはり文型としては同一です。

◇第三文型 (S) VO

182 齊破燕。(同右)

齊燕を破る。

説明は必要ないでしょう。主語・動詞・目的語がそれぞれ一字から成る第三文型の典型です。

183 今秦以三大王之力、西、挙巴蜀、并、漢中、東、收、两周、而西遷

九鼎、守、白馬之津。(同右)

今秦大王の力を以て西のかた巴蜀を挙げ、漢中を并せ、東のかた两周を収めて、西に九鼎を遷し、白馬の津を守る。

少し長めの例文ですが、主語「秦」の下に副詞句「以大王之力」が入って以降は、時に方角を示す副詞「西」「東」や接続詞「而」が現れるのを除けば、すべて動詞「挙・并・収・遷・守」がそれぞれ目的語「巴

蜀・漢中・两周・九鼎・白馬之津」を伴う第三文型の繰り返しです。

◇第四文型 (S) VOO

184 荆敢言之主。(『戦国策』趙上・恵文王)

荆敢之を主に言ふ。

主語「荆敢」、動詞「言」の下に直接目的語「之」と間接目的語「主」が並んでいます。この順序は、むしろ例外に属し、一般には「間接目的語+直接目的語」の語順を取ります。ここでは、直接目的語がたまたま軽い代名詞「之」であるため、それが文末に位置するのを嫌ったがゆえの語順なのでしょう。これは、英語で〈Tom gave it to her.〉とは言えますが、〈*Tom gave her it.〉とは言えないのと似たような言語現象ではないかと思えます。軽い代名詞〈it〉を文末焦点(end focus)に置くのを避けるのと同じく、やはり軽い代名詞「之」を文末に置くと、二重目的語の一文として不自然に響いたのではないのでしょうか？
いづれにせよ、動詞に下接する二つの要素「之」と「主」を、原文の語順のままに訓読しているのは、たしかな事実です。

185 李兌送蘇子明月之珠・和氏之璧・黑貂之裘・黄金百鎰。(同右)

李兌蘇子に明月の珠・和氏の璧・黒貂の裘・黄金百鎰を送る。

これが第四文型の典型です。動詞「送」に間接目的語「蘇子」と直接目的語「明月之珠……黄金百鎰」が着いています。ここでも、動詞に下接する二つの要素を、原文の語順どおりに訓じているさまが見て取れる

ことでしよう。

◇第五文型 (S) VOC

186 能因^ク敵^ニ変化^{シテ}而取^ル勝者^ヲ、謂^フ之^ヲ神^ト。〔孫子〕虚実)

能く敵に因りて変化して勝を取る者、之を神と謂ふ。

文末「謂之神」が「動詞+目的語+補語」の構造です。言うまでもなく、代名詞「之」は上文の内容を指しています。この「謂」の構文は、英語〈call〉が形成する第五文型、たとえば〈We call him John〉と同いで、「之」を「神」と呼ぶ意です。

187 敵^ニ秦^ヲ王^シ使^ム三^臣、敢^テ献^セ書^ヲ於^テ大^王御^史。〔戦国策〕趙上・武靈王)

敵^ニの秦^ヲ王^シ使^ム三^臣をして敢^テへて書^ヲを大^王の御^史に献^ゼせしむ。

一見してわかるとおり、これは使役構文ですが、漢文の使役構文は「使役動詞+使役対象(人)+使役動作」の語順を取り、英語の使役構文、たとえば〈I made him go there〉とまったく同じ構造を形成します。ここでは「使役動詞「使」+使役対象「臣」+使役動作「献」が一文の骨格を成し、そこに副詞「敢」・目的語「書」・副詞句「於大王御史」などが加わっていると見なせばよいでしょう。そして、英語の使役構文が第五文型に属する以上、漢文の使役構文も同じく第五文型と考えることができるのです。具体的には「主語「敵^ニ秦王^ヲ」+動詞「使」+目的語「臣」+補語「敢^テ…御史」と分析できます。

絶対にそうだと断言しかねますが、漢文で明確に第五文型を形成す

るのは、右の二つ、すなわち「謂」を用いた構文と使役構文とに限られるのではないかと思います。いささか紛らわしい例もありますが、それについては後述することとしましょう。

② 補足事項

以下、右の五文型について、三つの補足事項を記しておきます。

一つめは、第二文型と第三文型が必ずしも截然と判別できないことです。英語ですと、自動詞を用いれば第二文型、他動詞を使えば第三文型と割り切った態度で臨めます。けれども、漢文の動詞は基本的に自動詞と他動詞の区別がないので、第二文型とも第三文型とも解せる場合が少なくありません。たとえば、名高い故事「苛政猛於虎」(苛政は虎よりも猛なり)に見える次の一文です。

188 老^ニ似^リ重^有憂^者。〔礼記〕檀弓下)

老^ニに重^有ねて憂^有る者に似たり。

ここに見える動詞「似」は、果たして自動詞か他動詞か? 「〈似る〉というのだから、自動詞に決まっているのではないか」と言うなかれ。「似る」を自動詞と見なすのは、あくまで日本語の品詞感覚にすぎません。我々が相手にしているのは、古典中国語の動詞「似」なのです。たしかに、英語〈look like〉を思い浮かべれば、「似」は自動詞のように思われるでしょう。しかし、同じく英語でも〈resemble〉に思い到れば、「似」は他動詞とも解せるわけです。結局、「重有憂者」が第二文型の補語に当たるのか、それとも第三文型の目的語に相当するのかが、不

分明としか言いようがありません。やはり西欧語の文法範疇を古典中国語に当てはめようとする、どうしても無理を来たす場面に見舞われるわけです。⁽²⁾

二つめは、第二文型において動詞が脱落し、単に「主語+補語」(S C)となる場合があることです。もっとも、「動詞が脱落し」という言い方には、語弊があるかもしれません。あくまで英語の第二文型を念頭に置けば動詞が脱落しているかのごとく見えるというだけの話で、そもそも漢文にはこのような構文が存在するのだと捉えるのが正しい理解かと思えます。例文を二つ挙げてみましょう。

189 此^レ兩者^ハ君臣^ノ之分^也。〔戦国策〕趙上・武靈王

此の両者は君臣の分なり。

190 宋^ノ之^レ罪^重、齊^ノ之^レ怒^深。〔戦国策〕趙上・恵文王

宋の罪は重く、齊の怒は深し。

189では主語「此兩者」の直下に補語(名詞)の「君臣之分」が置かれ、190では主語「宋之罪」「齊之怒」に、それぞれ補語(形容詞)の「重」「深」が直結しています。英語であれば最低でも〈O〉動詞で主語と補語とをつなぐところでしょうが、漢文は贅辞に類する語句を必ずしも要しません。この第二文型の変形「SC」は、本来の第二文型「SVC」よりも、むしろ出現頻度が高いくらいだろうと思われまふ。例によって文系の学問の通弊、確たる統計に基づく話ではありませんが。

三つめは、知覚動詞を用いた文が第三文型なのか第五文型なのか、これまた動もすれば不分明に陥ることです。

191 (吾) 見^ル其^ノ先生^ト並^ビ行^キ也。〔論語〕憲問) *其^レ童子

(吾) 其の先生と並び行くを見るなり。

「その童子が年長者と並んで歩いているのを見かけたことがある」との意です。今、文型を考えるのに不要な副詞句「与先生」・副詞「並」および文末助詞「也」を取り除くと、次のようになります。

(吾) 見^ル其^ノ行^キ

一 二点で挟まれた部分には主語「其」と動詞「行」が備わっていますので、これを英語の *subject* (名詞節) と同等に見なせば、それが動詞「見」の対象すなわち目的語になりますから、「動詞「見」+目的語(名詞節)「其行」⁽¹⁾ 第三文型と考えて差し支えないでしょう。

けれども、動詞「見」が英語〈see〉に当たる知覚動詞であることに想いを致せば、例の「I saw her walking across the street」のごとき英語と同じ構文とも見なせるはず。つまり「動詞「見」+目的語「其」+補語「行」⁽²⁾ 第五文型と捉えることもできるのです。

漢文の動詞には時制がなく、また現在分詞形に変化するようなことはありません。あくまで「行」が置かれているだけです。果たして第三文型なのか、それとも第五文型なのか、両者を判別するに足る文法標識が存在しないわけです。⁽³⁾

しかし、いずれの文型に属するにせよ、文型そのものが要求する返り読みは、動詞と、それに下接する要素との順序を入れ換える作業だけです。下接する要素は、副詞句(178)・補語(180・181)・目的語(182・183)などですが、とりわけ注目すべきは、下接する要素が複数にのぼる第四

文型です。我々はすでに訓読に馴染んで久しいので、184・185の訓読に何か著しい特徴を感じることはないでしょう。けれども、訓読が意味の表出を旨とするのであれば、次のような訓読も可能なはずで

* 184 荆敢言^レ之^レ主^ニ。

荆敢主に之を言ふ。

* 185 李兌送^レ蘇子明月之珠・和氏之璧・黒貂之裘・黄金百鎰^ヲ。

李兌明月の珠・和氏の璧・黒貂の裘・黄金百鎰を蘇子に送る。

日本語は、一般に助詞ヲ格で直接目的語を、助詞ニ格で間接目的語を表せますから、両者の順序を入れ替わっても、意味の表出には何ら差し支えないはずで

と、ところが、この*184・*185のような訓読は絶対に許されません。必ず前掲184・185のごとく訓読することになってはいるのです。この原則を一般化して言えば、「動詞に下接する複数の要素は、その順序を入れ換えることなく、原文の語順のまま上から下へと訓読して動詞に返す」となるでしょう。この原則は、たとえば第三文型で目的語の下方に副詞句が着いた場合でも堅持されます。

192 魏敗^レ楚^ヲ於^レ陘山^ニ。〔『戦国策』趙上・武靈王〕

魏楚を陘山に敗る。

目的語「楚」と副詞句「於陘山」を原文の語序どおりに訓読してから動詞「敗」に返っています。これを左のように訓読することはあり得ません。

* 192 魏敗^レ楚^ヲ於^レ陘山^ニ。

魏陘山に楚を敗る。

要するに、動詞の下に複数の要素が並んだとしても、返り点を最低限に抑えようとするのが訓読の際立った特徴だと考えて宜しいでしょう。

* 184・*185に比べれば、184・185のほうが返り点は簡略ですし、その関係は*192と192についても同じです。漢文訓読というと、何かにつけて返り点が脚光を浴びますが、実のところ、返り点は必要最低限で済ませようとするのが、いわば『返り点の経済性』こそが訓読の特徴なのです。

③ 文型の基本

さて、英語の五文型に基づいて、漢文の文型を考えてきましたが、最後に、文型について絶対に見のがせない点の一つ指摘しておきましょう。それは、五文型を改めて見渡せば容易に気づくことですが、いずれの文型も「主部+述部」の構造から成っていることです。英語と同じく、漢文の中核を成すのは第三文型で、たしかに「動詞+目的語」の部分は、日本語の「目的語+動詞」と語順が異なるので、どうしても返り点によって語序を組み換える必要があります。しかし、大づかみに見れば、第三文型として「主部+述部」という構成であり、この点では日本語と同じ構造だと考えてよいでしょう。

もし漢文が、たとえばアラビア語のように「VSO」構造を基本としていたら、果たしてどうなっていたでしょうか？ 最低でも「VISO」のごとき語順変換が必要となり、煩わしいこと此の上ない。そもそも述部が主部の上下にばらけているのでは、一文ごとに構文感覚を逆撫でさ

れているようで、それほど慣れ親しんでも違和感が拭い去れないだろうと思います。むろん、これは、漢文と同じく「SVO」構造を基本とする英語にも当てはまる事情です。今日、好むと好まざるとにかかわらず、ともかくも日本人がこぞって英語の学習に取り組んでいるのは、英語の「主部+述部」という構造に多かれ少なかれ安心感を抱いているからではないでしょうか？ とにかく文頭のあたりに主語があるのだろうと予想していればこそ、ずっと文章に入ってゆける——この心理的効果は、決して小さくないだろうと思います。

五 まとめ

ここまで、あれやこれや漢文の性質を観察し、それを訓読するさいの特徴をも調べてきました。十分とは言えないまでも、なぜ漢文すなわち古典中国語という孤立語を、訓読なる作業を通じて、日本語という膠着語に変換できたのか——その初期条件は、あらかじめ明示できたものと思えます。

まず出発点として重要なのは、日本人が漢文に使われている文字¹¹漢字を用いて、自らの言語たる日本語を書き表そうと決意したことです。むろん、この借用の決意は、文字としての漢字にとどまらず、語彙としての漢語にも及びました。幸いにも漢字は表意文字（表語文字）でしたので、その意味に相当する日本語を割り当てる作業、すなわち訓読みが徐々に発達してゆきました。また、漢語に慣れるにつれ、そのまま音読みただけでも意味が了解できる借用語彙も増えてゆきました。その結果、音読み・訓読みを用いて、あらゆる漢字・漢語が発音できるようになったわけです。

この借用の決意、そして、その実践こそが、漢文訓読へと向かうための土台となったのでした。江戸時代後期、オランダ語に対して訓読まがいの試み¹²が実践され、幕末、明治初期には、英語を訓読しようとする試みもありました。また、森鷗外がドイツ語を訓読してみせた例も前々号（pp.1-4）で紹介しました。けれども、いずれも言語現象として興味深いとはいえず、結局は習慣として定着しませんでした。なぜなら、日本人は、オランダ語・英語またはドイツ語によって日本語を書き表そうとはしていなかったからです。西欧語にどれほど語順変換をほどこしても、日本語にはなりません。日本語の表記手段として選び取った漢文であればこそ、語順の組み換えによって、それなりに日本語として成立したのです。実際には「選び取った」わけではなく、必要に迫られて「自らつかみにゆく」しかなかったのでしょうか。

ただし、返り点を案出し、漢文の語順を変換しただけでは、日本語になりません。孤立語の漢文を膠着語の日本語にするためには、日本語なりの膠着要素を加えなければなりません。ここが肝腎なところで、加える作業によって日本語としての体裁を整えることができたのは、漢文が孤立語であったという僥倖に恵まれたがゆえだと考えます。もし漢文が屈折語、日本語が孤立語であったならば、漢文の語形変化が示す語尾その他の要素を出くわすたびに削り取らねばならず、甚だ厄介な作業になったことでしょう。今日の英語は、西欧語のなかで例外的と言ってもよいくらいに屈折変化が衰えています¹³が、それでも人称代名詞に〈my-He〉のような格変化が残っていますし、たとえば動詞〈learn〉に〈-ing〉を加えて現在分詞または動名詞〈learning〉とし、〈-ed〉を加えて過去形または過去分詞形〈learned〉とするような操作は、当然のごとくに実行されています。後者ならば、〈-ing〉や〈-ed〉を消去して中

核概念〈learn〉を取り出せませんが、前者〈I-my-me〉から中核概念〈I〉を取り出すとなれば、〈my〉も〈me〉もそれぞれ二字を丸ごと取り消し、改めて〈I〉を書き込むしかありません。もちろん、動詞にしても、〈learn〉のような規則動詞ならばまだしも、不規則動詞、たとえば〈speak〉となると、過去形〈spoke〉ならば〈oke〉三字を、過去分詞形〈spoken〉ならば〈oken〉四字を消して、それぞれ〈eak〉に書き換えることとなります。言うまでもなく、そのような煩わしい作業を実行する人がいるはずもなく、実際は〈spoke〉は〈speak〉の過去形、〈spoken〉は〈speak〉の過去分詞形と記憶して済ませているわけです。こうした削除を伴う作業ナシに漢文に臨めたのは、実に幸運であったと思います。図式化して示せば、我々は193のごとき「引き算」を含む厄介な操作ではなく、194のような「足し算」の操作で漢文という孤立語に臨むことができたのです。

193 屈折語（西欧語）→ 屈折要素＋書き換え／↓ 翻訳⇨ 膠着語（日本語）

194 孤立語（漢文）＋膠着要素⇨ 膠着語（日本語）

では、漢文に加えるべき膠着要素は何か？ これは、今なお我々が「送り仮名」と称して漢文に付けている活用語尾や助詞・助動詞の類を指します。具体的には、宣命体の成立とともに、日本人は漢文に何を加えれば日本語になるのか、明確に意識したものと考えます。宣命体を発案したことによって漢文に付けるべき膠着要素に気づいたのか、それとも、漢文に添えるべき膠着要素が明らかになったから宣命体が生まれたのか、両者の先後関係は判然としませんが、当て推量を許してもらえ

ば、たぶん両者は鶏と卵の関係に同じく、そうと意識したときには、すでに両者が存在していたのが実情ではないでしょうか？

もっとも、漢文が日本語に変換するには手に餘るような性質を備えていたとすれば、膠着要素を加えて事足れりとはゆかなかったはずですが、しかし、これまた幸いなことに、漢文には日本語との共通点も多く、何かと処理に融通が利いたものと考えてよいでしょう。

漢文の名詞には、単数・複数などの区別がありませんし、小うるさく冠詞が付きまとうこともありません。男性名詞だの女性名詞だの、文法性もないうえ、与格・対格はもとより、主格・所有格などの格変化も見られません。動詞にも時制がなく、完了・未完了の標識が添えられることもなく、現在分詞や過去分詞も存在せず、条件法・接続法などの法も存在しません。形容詞は変化せず、比較級・最上級などありません。さすがに前置詞は、日本語に存在しない品詞ですので、附属する名詞から返読する必要が生じますが、品詞として返り読みを要求するのは、この前置詞に加え、「難^{がた}レ^V」「易^{やす}レ^V」のような一部の形容詞だけです。まさしく漢文は「無い無い尽くし」、手前勝手な見方をすれば、膠着要素が付け加わるのを待ち望んでいたような景色にさえ映ります。

とりわけ、漢文に關係代名詞がないのは幸いでした。今日、我々が英語の關係代名詞に悩ませられているのは、殊に翻訳のさいに何かと手こずるのは、誰もが認める事実でしょう。いわゆる關係節は、先行詞⇨名詞に対する後位形容詞語群と捉えることができますが、日本語では、名詞に前置する前位形容詞語群しか許されませんので、つい關係節を訳して先行詞⇨名詞の修飾語句にしてしまいがちです。關係節が短ければ、その常套手段でも片がつきますが、たまたま關係節が長かったりすると、肝腎の先行詞⇨名詞にたどりつくまで多くの字数を要し、日本語として、

誤りとは言えないまでも、悪文になってしまう危険性が高く、なかなか苦勞するわけです。しかし、幸運にも、漢文には関係代名詞がありませんでした。

関係代名詞を補うと意味がわかりやすくなる漢文は存在します。前々号(912下)で掲げた有名な一文を再掲してみると――

07 有^リ朋^ト自^{ヨリ}遠^ク方^ニ来^ル、不^レ亦^タ樂^シ乎^ヤ。(『論語』学而)
朋^ト有^リ、遠^ク方^ニ自^{ヨリ}来^ル、亦^タ樂^シ乎^ヤ。

注目してほしいのは、上六字です。この一句は、中国語の文法で兼語式と呼ばれる構造で、便宜上、副詞句「自遠方」は取り除いて考えます。よくよく見れば、名詞「朋」が上接する動詞「有」の目的語(意味上は主語)であると同時に、下接する動詞「来」の主語にもなっていることに気づくでしょう。「朋」が上に対して目的語、下に対して主語と、二つの文法機能を兼ねているので、兼語式と呼ぶわけです。こうした兼語式については、「朋」の直下に主格の関係代名詞〈who〉を補うと意味がはっきりします。

195 有^リ朋^ト [who] 自^{ヨリ}遠^ク方^ニ来^ル

さらに、一般形で示せば、次のようになるでしょう。

196 有^リ N [who] V 自^{ヨリ} V する N がある。

もっとも、右のように関係代名詞を措定すれば意味がわかりやすくな

るといふ話にとどまり、実際に漢文に關係代名詞が存在するわけではありません。關係代名詞〈who〉を補うのは、あくまでも解釈上の便法にすぎないのです。

なお、誤解のないよう言い添えておけば、漢文は孤立語ゆえに關係代名詞がないというわけではありません。同じく孤立語でも、たとえばタイ語には、關係代名詞が存在します。便宜上、分ち書きして発音記号を添え、相当する英単語を示せば――

197	numl	ŋ	ɾɔn	ʔəu	ɲɪ	ɑːjəu	diː	(7)
	kaʔeɛ	θiː	khaw	sɪnu	maa	ni	ɑːjəu	
	coffee	which	he	buy	come	this	good	very

直訳は「彼が買ってきたこのコーヒーは、とてもおいしい」。一見してわかるとおり、先行詞(名詞)の〈numl〉(コーヒー)に、關係代名詞〈θiː〉に導かれた關係節〈ɾɔn ʔəu ni〉(彼が買ってきた)が着いています。孤立語でも、このように關係代名詞を有する言語は、現に存在するわけです。漢文に關係代名詞がなかったことは、やはり一つの幸運であったと言わざるを得ません。

文型については、本稿で論じましたので、贅言を費やす必要はないでしょう。日本語の語順に変換するには、動詞とその下接要素を返り点で組み換えねばなりません。けれども、下接する要素が複数に及ぶとき、決してその複数の要素を返読することはありません。複数の要素は、原文に記された語順どおり上から下へと読み下すだけです。その分、返り点が簡略化されますので、それを敢えて《返り点の経済性》と名づけてみました。漢文と聞くと、すぐに返り点を想い起こす向きが多いかと思

います。たしかに、語順の転倒を指示する返り点は、漢文訓読の最も目立つ特徴でしょう。しかし、その返り点には、なるべく簡略に済ませ、必要最小限に抑えようとする意図が働いているのです。この《返り点の経済性》は、決して忘れてはならない訓読の特徴だろうと考えます。

以上を要せば、漢文には日本語に変換すべく種々の有利な条件が備わっていた、また、それを受けとめる訓読という作業にも、日本語に変換するための労力が最低限で済むよう省力化の工夫が凝らされていた、ということになります。世には、他の外国語とは異なり、漢文についてだけ訓読という特殊な方法を用いるのは怪しからんとする意見があります。けれども、おそらくは、漢文が対象であればこそ訓読という方法が可能であったと考えるのが正しいのではないのでしょうか？ 誤解を恐れずに言えば、漢文には訓読による接近を許すだけの必然性が秘められていたのです。それを確実に剔り出し、現に実践してみせたのが訓読という営為でした。この稀に見る貴重な言語現象を何とか末永く承継いでゆきたいものだと考えます。

【注】

(1) 多久弘一・瀬戸口武夫『漢文解釈辞典』（国書刊行会、一九九八年）二四〇～二四二頁は、17「何渡為」について、もと「何為渡」を強調表現とすべく「動詞「為」+目的語「渡」を倒置し、かつ倒置の標識「之」を入れた「何渡 之為」（何ぞ渡ることを之れ為さん）を想定したうえで、さらに倒置の標識「之」を省略したのが「何渡 為」であると説く。けれども、入れたはずの倒置の標識「之」を省くという手順に不自然さを感じられ、そもそも原形を「何為渡」と指定するのは、最終的に訓法として定まった「渡」という名詞性に引きずられた結果のように思われる。私見によれば、「何渡為」は、あくまで「何為渡」の動詞「渡」を強調すべく「何」と「為」で上下を挟んだ表現で、「渡」のごとく「渡」に名詞性を附与するのは、単なる訓読上の便法にすぎない。170～175で「如何」「奈何」「若何」などに見られたような分離による挟みつけの語感が「何為」にも発揮されたと考えるのが、最も素直で事

実に近い捉え方ではないだろうか。

(2) 私見では、「似」の下に前置詞の類（たとえば「於」「乎」など）が記されていないれば、便宜上「似」を他動詞と見なし、形式的に第三文型と割り切ってしまうべきと考えられる。このように捉えることにしておけば、実例に対して次のように即応できる。

・行有餘力則以學文（論語「学而」）

↓「学」と「文」が直結しているので「学」は他動詞。

・君子博學於文（論語「雍也・顔淵」）

↓「学」が前置詞「於」を介して「文」と結ばれているので「学」は自動詞。

(3) ちなみに、「論語」の英訳五種は、191を次のように訳している。第三文型の訳文は Legge のみ。他の四者は、すべて知覚動詞構文すなわち第五文型を用いている。

・James Legge, 1991: I observe that he walks shoulder to shoulder with his elders.

・D.C.Lau, 1979: I have seen him presume...to walk abreast his seniors.

・Chung Hsiang, 1997: I saw him walking side by side with his elders.

・Burton Watson, 2007: I've seen him walk shoulder to shoulder with his elders.

・Anping Chin, 2014: I have seen this boy...walking abreast of his elders.

右の英訳五種の詳しい書誌情報は、前々号 p.26 上・注 (5) を参照のこと。

(4) ここにいうアラビア語は、いわゆる正則アラビア語（フスハー）を指す。

(5) オランダ語および英語の訓読については、拙文「漢文訓読と英文解釈——英文訓読「宿命論」／川本皓嗣・井上健」編『翻訳の方法』（東京大学出版会、一九九七年）一九七～二一五頁を参照。

(6) 宣命体については、本来ならば前々号において論ずべきであったが、今なお考えの熟さぬ点が残るため、本稿を含む一連の拙文では扱えなかった。ここに記して後考を期す。

(7) このタイ語の例文 197 は、吉田英人『ゼロから始めるタイ語』（三修社、二〇一四年）一一二頁の用例をほぼそのまま借用した。タイ語は「被修飾語＋修飾語」の語順を取り、主語（*main*）（コーヒー）に形容詞（*adj*）（おいしい）が補語として着く場合、英語の〈*be*〉動詞に相当する繫辞の類は必要としない。この点で、197 は、漢文の第二文型の変形たる「SC」構文に似る。

* 本稿の漢字は、常用字体を原則とした。

* 本稿を以て、第二十七号より続けてきた「漢文訓読の初期条件」に関する考察をひとまず終了する。